錬卒

行軍の出来・不出来が作戦の有利・不利を分かつ等のことを十分に心得ておかねばならない。敵に我が企図を察知させることなく兵の前進・停止・後退を定めておくことを第一とすべきである。前後左右、大将の思うとおりに動かせる時には、千万の敵に対して味方が十百であったとしても、それが負けるということは有り得ない。将の命令に違反すれば、罰する事を厳正にせよ。士卒を使うのに、その気性の種類に応じて練成し、用いる時、当然のことながら戦は常に有利である。生まれつき勇敢で、剛毅で死を恐れない者、気性が鋭利であって艱苦を痛みと感じない者、力量があって武芸に達している者、鉾（ほこ）に秀でた者、弓射に秀でた者、速足早業の者、恨み心を持つ者、臆病な者、降参した者、単に参列している者、牢人等、それぞれに列を分けて備えを成すことが重要である。これは太公の練卒の法から引用したものである。勇を使い、貪を使い、愚を使うというのもこれと同じである。愚かな者はその死を観ず、貪欲な者は利を見てそれに向かって走る。ことごとく至情に相随って兵卒を用いる時には、功績をなす士はいずれの世にも少なからず現れるようである。「いわんや良馬鞭有るときは遠道を致し、賢士合うこと有るときは、すなわち大道明たるべし」とも云われるのは、とにもかくにも将の才配（才能に応じて練成し、用いること）によってこそ兵の勝ち負けは有るという意味である。

多聞丸（楠木正成の幼名）が、もしも成人した後に天皇の御用にも立つべき時節になったならば、かねてから郷里の地に伝え置くところの二三の才配を以て、摂津・河内両国の士卒を漏らさず手なづけて、良士となる人材を棄ててしまうことがない様にしなければならない。たとえ千憶の勢を持ったとしても、その人々が志すところを得られず、

心が背き衆人が離反すれば何の益するものがあろうか。その上で、これら良士をもって備立・利変・奇正・虚実といった戦い方の実行単位となるように教え、訓練してそれらを究めれば、これこそ私が切に願い望んでいたところである。幾多の人を持ちながら、譜代の家業を怠って、伝えられてきたところの才配を執ることができなければ、全くもって素餐（功績も才能もないのに高い位にいて報酬を受けること）に等しい。早く摂津と河内の両国を差し上げ、多聞丸は永く仏門の徒となるべきである。又、これらと同時に、人を識ることの秘訣を伝授されて知らねばならない。多聞丸は成童（五歳以上の児童）になったならば、他の人を除いて、ただ一人で信じてこれを聞受しなければならない者なのである。